

Virginia Woolf と戦争—*Jacob's Room* 及び *Mrs. Dalloway* における戦争の表象について

出 淵 敬 子

本日はお招きいただき、ありがとうございます。近年 Woolf 研究が非常に進んだことは皆様も御存知の通りです。私は Woolf の作品における戦争や平和主義に関心を持っていますが、今日は Woolf の上記2作品についての感想を交えながら話させていただきます。

まず Woolf の殆どの小説、およびエッセイ、とくに *Three Guineas* には戦争についての言及があります。それらの作品は多かれ少なかれ Woolf の時代—第一次大戦勃発から戦間期を経て第二次大戦直前まで—の影響を受けています。女性作家である Woolf にとって戦争をいかにして表象するかということは、難問だったでしょう。当時女性は看護活動、救急活動に加わる以外は自ら戦場を体験することはありませんでしたから。Woolf の義弟二人はフランスの戦場で戦い、一人は戦死、もう一人は Septimus のモデルといわれています。*Jacob's Room* 12章—14章に戦争の表象が集中していますが、Jacob の母 Flanders 夫人の姓が大戦の激戦地フランドル地方を暗示し、幼い Jacob が拾う羊の顎の骨とともに戦争と死を予兆しています。総じてこの作品では戦争の表象は乾いた文体と断片的イメージの集積によって、戦艦の若者達の海底での死、玩具の兵隊あるいはマッチ棒のような軍隊の動きなどが俯瞰的に描かれます。換言すれば、生身の兵士の存在感のないモダニスティックな手法が特徴です。同じことは、大戦が始まった日のロンドンのホワイトホールの空間的描写についても言えます。大戦支持の信条を表す旗を立てた行進、海軍本部の電信による外国とのニュースの交信、首相と閣僚が歴史の進路を決める様子などが映画の映像のようにモノとして表層的に提出されます。他方時間的に歴史を遡って、ホワイトホール近辺の18-19世紀の政治家たちの大理石像によりイギリスの過去の偉大さと現在が対比されます。こ

のように作者はあくまでイメージにより時間と空間を交差させる表象を試み、地理的にも歴史的にも自由な視点を獲得し、古い文明の栄えた都市を同時に写そうとさえ試みています。最終章の最後で Flanders 夫人が差し出すジェイコブの古靴は、彼の戦死を暗示し、彼の生と死を一点に凝縮して哀切に訴えます。この方法は写真家のそれに近いもので、石内都氏の写真集『ひろしま』の表象に非常に近いものがあります。被爆者の衣服、靴、時計、眼鏡などは、突如として断ち切られた日常を想像させ、洋服のしみは被爆の苦しみを感じさせるのです。言葉による説明でなく、眼に見えるモノによって痛切な感情を伝える表象法は、*Jacob's Room* に一貫して使われている際立った特徴です。

次作 *Mrs. Dalloway* では戦争神経症に苦しむ帰還兵 Septimus の姿を通して、戦争はより前景に出てきます。この症状の帰還兵は8万人ともいわれ、Siegfried Sassoon や Wilfred Owen は実戦の経験から戦争詩を書きました。翻って T.S. Eliot などモダニズムの詩人が戦争体験なしで戦争をテーマに取り入れた作品を書いたことは興味深いことです。Woolf は帰還兵の幻覚と孤独、貧しい外国人妻の孤立、精神科医の無理解を描くことによって、一見華やかな戦後の社会の暗部を描き、その暗部は Dalloway 夫人と周囲の人々の心にも共通してあることを浮かび上がらせ、人々の内面深くに潜む戦争の影響とその悲劇性を暴いているといえます。

参考文献

Karen L. Levenback, *Virginia Woolf and the Great War*, Syracuse UP, 1998.

Mark Hussey ed, *Virginia Woolf and War – Fiction, Reality, and Myth*, Syracuse UP, 1991.

石内 都 『ひろしま』集英社、2008

(日本女子大学名誉教授)